現地情報

研究員受入制度を活用した花壇苗親株の健全化技術の修得

花農家にとってオリジナル品種の育成は有利販売の大きな武器となる。加西農業改良普及センター管内では生産者育種が盛んに行われており、その親株を健全に保つことが重要な課題となっていた。花壇苗農家が県立農林水産技術総合センターの研究員受入制度により組織培養の技術を身につけ、親株の健全化を図っている。

内　容

加西農業改良普及センター管内の鉢花・花壇苗は27戸、約６haで栽培されており、金額ベースで県全体の21%を占めている（兵庫の花集配センター取扱2011年実績による）。生産品目は挿し芽や株分けで増殖する栄養繁殖系が多く、生産者育種や仕立て方の工夫によるオリジナル商品が活発に開発されている。

しかし、親株の更新の遅れや病害の発生などにより、増殖効率が低くなるものが見られるようになっていた。

そこで県立農林水産技術総合センター（以下センター）の研究員受入制度を活用して親株の健全化を図るように指導した。この制度はセンターの研究施設を利用して、必要な技術の向上を図ることが出来る制度であり、2008年６月の制度改正により農業者団体からの申請が可能となっている。

兵庫県花卉協会に所属する加西市のＮ氏は、ハボタンを主体とする花壇苗農家である。長い栽培経験の中で交配による自家育種も手がけており、市場からも高い評価を得て販売している。そこで、黒腐病をはじめとする病害虫によるオリジナル品種の親株喪失リスクを回避し、効率的に大量増殖するために、ハボタンの側芽を培養する技術を身につけることとした。

2009年６月から約３カ月の間に７回の実習を重ねた。クリーンベンチの利用方法や側芽の殺菌といった組織培養の基本技術をはじめ、植物ごとの適切な培地条件、ホルモン濃度をセンター農産園芸部の指導により学んだ。

写真　組織培養技術の実習

今後の方針

これまでに加西農業改良普及センター管内で４戸の花農家が当制度を活用して技術を修得し、11品種の親株更新に成功した。得られた植物が健全化しているかどうかを農家自身が栽培することで確認し、再び汚染しないように母株を隔離するなどの気遣いが必要である。当制度で修得した技術を生かすため、自宅に簡易な培養施設を導入しようという動きもある。

育種目標は様々であってよい。農家個々の成功事例を積み重ねることで、全体として魅力あふれる花き産地となるように、農家の育種技術の向上を支援していきたい。

初田　いづみ　（加西農業改良普及センター）
（問い合わせ先　電話：0790－47－1448）